



Title	「VP+きる」の意味と語形成 : 「VP+補助動詞」型複合動詞の分析に向けて
Author(s)	張, 栩
Citation	大阪大学言語文化学. 2026, 35, p. 67-85
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105220
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「VP + きる」の意味と語形成

— 「VP + 補助動詞」型複合動詞の分析に向けて—*

張 栩**

キーワード：補助動詞「きる」、複合動詞、共合成

As the second verb (V2) in compound predicates, auxiliary verbs are defined as elements whose original meanings have undergone semantic bleaching, largely lost their case relations and instead functioning to modify the preceding main verb (V1). This study investigates the theoretical viability of analyzing the two interpretations of the Japanese auxiliary verb *kiru* — 〈completion of an action〉 and 〈progression of a state to its extreme〉 — not as distinct lexical senses, but as semantically differentiated readings derived from a single underlying structure through composition with the event denoted by the embedded VP. I introduce a diagnostic test using the potential form *kirenai*, which demonstrates that the two interpretations can be empirically distinguished. Despite their differences, both interpretations share a core semantic element: the elimination of the portion of the incremental theme not affected by the event denoted by the embedded VP, which functions as an essential semantic component of the embedded VP itself. Building on this shared element, I propose a unified semantic structure for *kiru*, modeled through an integration of Qualia Structure and Lexical Conceptual Structure. Furthermore, I show how the two interpretations arise compositionally, by identifying which aspects of the embedded VP's meaning *kiru* operates on within this proposed framework.

The significance of this study is threefold. First, it resolves the ambiguity of classification criteria in previous research that attempted to separate the two interpretations of *kiru*. Second, it overcomes the limitations of prior analyses that regarded *kiru* merely as signaling the temporal endpoint of the embedded VP, without accounting for its semantic interaction with the embedded VP. Third, the shared semantic element identified here can be extended to other Japanese auxiliary verbs expressing perfective aspect, such as *nuku*, *tsukusu*, and *toosu*, thereby contributing to a broader understanding

* The Semantics and Word Formation of “VP + *Kiru*”: Toward an Analysis of “VP + Auxiliary Verb” Compound Verbs (ZHANG Xu)

** 大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻博士後期課程

of aspectual auxiliaries in Japanese.

1 はじめに

「きる」は、複合動詞の後項動詞（V2）として現れ、(1) に示す「物理的な切断」を表すもの、(2) と (3) に示す完了相¹を表す補助動詞²的な用法がある（姫野, 1999; 杉村, 2008）。

(1) a. 彼女は糸を噛み切った。（作例）

b. *彼女は糸を噛み切ったが、糸は切れていなかった。（作例³）

(1a) が成立し、(1b) が成立しないことからわかるように、(1) における「切る」の意味情報には、糸が切断されているという結果状態が必ず含まれている。

(2) a. 彼女は本を読みきった。

b. 彼女は本を読みきったが、本は切れていなかった。

(3) a. 空が澄みきった。

b. 空が澄みきったが、空は切れていなかった。

一方、(2b) と (3b) が容認されることから、(2) と (3) の「きる」は、対象物の切断を含意しておらず、本を読む行為や、空が澄むという状態変化の完了を表している。

(4) a. 彼女はその本を{ 読んだ / * 読みきった } が、その本を読むことは完了していない。

b. 空が{ 澄んだ / * 澄みきった } が、まだ完全には澄んではない。

(4a) に示すように、「読んだ」には事象の完了をキャンセルする表現が後続できる一

¹ 本研究における相（または「アスペクト」）という用語は、寺村（1982）に従うものであり、動的事象がある一つの過程の中のありかた——完了・未完了、継続、などを示す表現である。日本語で、相を表す役目をするのは、動詞活用形、動詞テ形に後続する補助動詞の一部、動詞連用形に後続する補助動詞の一部という3種類になる（寺村 1982:115-117）。

² 本研究で用いる「補助動詞」という用語は、姫野（1998）および『複合動詞レキシコン』コーパスに従うものである。姫野（1999:121-122）によれば、補助動詞には、動詞の「～て」形の後に付くものと連用形に付くものがあり、後者の場合、V1 のとる格助詞が複合動詞全体を支配する。『複合動詞レキシコン』では、複合動詞における補助動詞要素を、本来の意味が希薄し格関係もほとんど失われ、前項動詞を修飾する補助的な機能を果たすものと定義している。そして、複合動詞の後項動詞として働く「きる」はその典型例とされている。

³ 特に断りのない限り、これ以後で提示する例文は筆者による作例である。

方、「読みきった」には後続できない。(4b)でも同様に、最終到達点に到達していることをキャンセルする表現は「澄んだ」には後続可能だが、「澄みきった」には後続できない。これらの事実から、「きる」が補部 VP の完了相を示すことが確認できる。姫野 (1999) は、(4a) の「きる」が表す意味を「完遂義」、(4b) の意味を「極度義」と呼んでおり、本稿もこれに従う。

先行研究では、「きる」を意味や結合制約に基づいて分類することがよく議論されているが (姫野, 1999; 杉村, 2008 等)、いずれも分類の基準が曖昧であり、かつ容認される例がうまく捉えられないという課題がある。日高 (2022, 2025) は、「きる」の複数の意味を構成的に分析しており、補部 VP との意味合成を通じて「きる」の可能な解釈への説明を試みているが、一方で反例も残る。

本研究はまず、(2) や (3) のような、完了相を表す「きる」(以下、この完了相を表す用法を「きる」と呼ぶ) の<完遂義>用法と<極度義>用法に関して、言語的な診断テストを用いた厳密な分類基準を提案する。次に、「きる」の解釈は一つの語義が補部 VP との共合成 (Cocomposition) (小野, 2005; Pustejovsky, 1998) によって分化したものと捉え、「きる」の意味構造および補部 VP との意味合成のプロセスを、項構造・クオリア構造・語彙概念構造を併用したモデルで分析する。意味合成のプロセスについて、日高 (2025) が「テイル」形式あるいは「タ」連体修飾を介した意味合成を提案しているが、本研究ではその説明では捉えきれない反例を提示し、「きる」と補部 VP との直接の意味合成のプロセスを提案する。このような分析により、「きる」が複数の解釈を持つ理由や、結合制約の成因といった先行研究で十分に説明されてこなかった課題を解決できることを示す。

2 先行研究と問題の所在

2.1 「きる」の意味解釈に関する研究

日本語学や語彙意味論の分野では、「きる」の意味に関する研究が進められており、特にその意味の分類と定義をめぐって議論がなされている。姫野 (1999: 177-181) では、「きる」の完遂義用法は (5a) のように継続動詞に付くものに対して、極度義用法は (5b) のように瞬間動詞、特に変化の過程を経て結果の状態が残るような結果動詞に付くと述べている。

- (5) a. 防ぎきる、考えきる、走りきる、歩ききる、燃えきる (姫野 1999: 177-181)
- b. 枯れきる、静まりきる、疲れきる、冷えきる、困りきる (姫野 1999: 177-181)

さらに、姫野（1999）は前項動詞が表す意味に関して、(5a) 完遂義の「きる」に付く継続動詞はほとんどが人の意志的行為を表す語であり、(5b) 極度義の「きる」に付く瞬間の状態変化動詞は、自然現象、人の生理的現象、精神や感情の動きを表すものが多いと述べている。つまり、前者の補部 VP には動作主 (Agent) が、後者の補部 VP には対象 (Theme) あるいは経験者 (Experiencer) が関与していると考えられる。前項動詞の意味タイプによる分類は、「きる」の結合制約を説明する上で有益だが、分類基準が曖昧であるという課題がある。例えば「忘れきる」の場合、V1 は瞬間動詞であり、姫野（1999）の分類方法に従えば、(6a) のように「学科の内容を徐々に忘れ、最終的に何も残らない」という極度の状態に達する意味だけを表すはずである。しかしながら、実際には (6b) のように、「トラウマを頑張って忘れる」という行為の完遂を表すことができる（以下は Web からの引用）。

- (6) a. 正直学科忘れきる前に受けてもいいかなって思ってたんだけど。⁴
 b. トラウマは数年ぶりなので、今年は忘れきりたい。忘れきることに全力を使う⁵

つまり、「きる」の意味解釈は V1 に依存するのではなく、「きる」が補部として取る事象全体の性質に依存する。本稿は、姫野（1999）の〈完遂義〉と〈極度義〉を明確に区別する新たな基準を 3 節で提案する。

また、「きる」の意味が多義か単義かを論じた研究として、日高（2022, 2025）がある。日高（2022）は、「きる」の統語構造を明らかにした上で、形式的意味表示を用いて「きる」の意味構造を分析し、「きる」の意味構造と統語構造の関連を示すことを目的としている。意味構造の側面からは、「きる」の前項動詞が表す補部 VP を (7) の 3 種類に分け、(7a, b) 型と (7c) 型を取る「きる」をそれぞれアスペクト的 ($-kir_{Asp}$) 「きる」、モダリティ的 ($-kir_{Mod}$) 「きる」とし、生成語彙論 (Pustejovsky, 1998) の観点から (8) に示す 2 つの意味構造を提案している。

- (7) a. 一定の時間展開し、終了時点が定義される活動（例：1 時間しゃべる）
 b. 最終時点が定義される、継続的・断続的状态変化を伴うイベント（例：ケーキを 2 個食べる、100cc の洗剤を使う）
 c. 瞬間動詞で、最終到達状態が定義されないイベント（例：冷える、澄む）

⁴ 引用元：<https://x.com/yngrndx1/status/1644266539921833984> (2025 年 9 月 7 日確認)

⁵ 引用元：<https://x.com/sikussan/status/1348788004408549376> (2025 年 9 月 7 日確認)

(spk) や視点保持者 (pvh) が敢えて事象終了時点 (p) で切る (CUT) ことを指す。完遂義では補部 VP の終了時点を指し、極度義では補部 VP の結果状態の中の一時点 p で切ってそれを最終到達点とすることを指す。しかしながら、この分析も時間的特性に偏っており、「きる」が補部 VP の内部の意味情報に与える影響を扱っていないという日高 (2022) の限界を超えていない。さらに、日高 (2025: 72-79) は「きる」が最終到達点を持たない動詞を補部にとると容認性が低いが ((9))、「テイル」形式や「タ」連体修飾を伴うと改善される ((10)) という観察をしている。

- (9) a. ?* あいつの性根は遠からず腐り切るだろう。
 b. * 健はそのことを知れば { 困り / 疲れ / あきれ } 切るだろう。
 (10) a. あいつの性根は腐り切っている。
 b. 健が { 困り / 疲れ / あきれ } 切っていた。

その観察を根拠に、日高 (2025) は、VP がテイル・タ形と結合した後に「きる」と結合するという語形成プロセスを提案している。しかし、その出発点とされる一般化には再検討の余地がある。実際、(11) に示すように、「きる」が「テイル」形式や「タ」連体修飾を伴わずに使われる事例も多く観察される (以下は Web からの引用)。

- (11) a. 心が腐りきるその直前になったら、一緒にバンドやろうね。⁶
 b. もう夏のはずだが靴下を履かないと足が冷えきる。⁷
 c. 明日も必要以上に神経削って疲れきるだろうけど、患者さんのために頑張りたい⁸
 d. 大好きな人と綺麗な夜景を見れたら心の中まで澄みきるだろう。⁹

さらに、日高 (2025) は、「VP + きる」の容認性がテイル形やタ形連体修飾によって高まる理由を次のように説明している。すなわち、状態変化動詞 (例:「濁る」) には明確な最終到達点がなく、最終到達点を持つ事象だけを補部にとる「きる」と結合すると意味的な齟齬が生じる。テイル形やタ形連体修飾は、状態変化動詞の結果状態の部分を取り立てて最終到達点とする機能を持つため、齟齬を解消し、容認性を高めると説明されている。

⁶ 引用元: https://x.com/Drkei_japan/status/481828479969660928 (2025 年 8 月 20 日確認)

⁷ 引用元: <https://x.com/aruhazunonai/status/1921144584253366764> (2025 年 8 月 20 日確認)

⁸ 引用元: <https://x.com/kansuke520/status/1129376931642691584> (2025 年 9 月 6 日確認)

⁹ 引用元: https://x.com/Tetsu_19991102/status/662275121940295680 (2025 年 9 月 6 日確認)

しかし、「きる」が常に最終到達点を持つ事象だけを補部にとるという前提は、必ずしも妥当とは言えない。むしろ、最終到達点を持たない事象を補部に取り、それに最終到達点を付与する機能を担っていると考えられる。(12)はその根拠となる用例である。

- (12) a. 会場が静まったが、まだ会場にざわめきが残っている。
 b. * 会場が静まりきったが、まだ会場にざわめきが残っている。

(12a)の「会場が静まった」は、ざわめきが完全に消えなくても成立するため、到達点を含まない事象である。そして、(12b)が容認されないことから、「きる」が付くと、ざわめきが完全に消えているという最終到達点が必ず導入されていることがわかる。

以上を踏まえて、先行研究は「きる」の機能を時間的特性のみで捉えており、「きる」が補部 VP の最終時点あるいはその後の一点を指すことが明らかになったが、なぜ「きる」がその機能を持つのかは十分に説明していない。本研究は、「きる」は補部 VP の意味情報における「行為 / 変化が及ばない部分」を消滅させることで、補部 VP に最終時点が付与すると主張する。この機能を説明するには、「きる」と補部 VP の語彙の意味及び語用論の意味が必要になるため、これらの情報を広く記載できるクオリア構造を理論的枠組みとして利用する。また、「きる」の意味は補部 VP の違いによって完遂義と極度義の間で切り替わるため、この意味解釈の多様性を固定的なものではなく、補部 VP との相互作用によって生じるものとする。このような動詞と文脈情報との相互作用を捉えるには、生成語彙論 (Generative Lexicon, 以下 GL) における共合成という意味生成の仕組みが適している。

2.2 理論的枠組み：共合成について

GL は、Pustejovsky (1998) によって提案された理論であり、従来の語彙意味論が主に語の固定的な意味記述に依拠していたのに対し、語と語の結合による動的な意味生成を記述することを目的としている。そのため、GL では語彙項目にクオリア構造と呼ばれる複数の意味的側面を与え、文脈に応じてそれらを利用することで多様な解釈を説明できる仕組みを備えている。Pustejovsky (1998) では、語彙の意味を捉えるために、項構造・事象構造・クオリア構造・語彙階層構造といった 4 つの意味表示モデルの必要性を主張している。その中でもクオリア構造はその語彙項目を最もよく説明する属性や事象の集合として位置付けられている (小野, 2005: 24; Pustejovsky, 1998: 419)。動詞のクオリア構造の表記方法は研究者によって異なるが、本研究は由本 (2014) に従い、構成役割 (Constitutive role) に動詞の語彙概念構造 (LCS) を、目的役割 (Telic role) に

動詞の表す出来事の目的・機能を、形式役割 (Formal role) に出来事がもたらす結果及び予測する結果を、主体役割 (Agentive role) に結果事象を引き起こす原因およびその表現が成立するための前提を記入する。

GL の中核的な意味合成の仕組みの一つが「共合成」である。これは動詞の不完全指定された意味が補語名詞の語彙情報によって補完され、新たな意味解釈が生成される現象を指す (小野, 2005: 49)。例えば、He began the book では、began が個体名詞 the book を補語に取っているにもかかわらず、began reading the book という事象の意味を含意する。この時、reading は動詞 begin の意味情報に元から含まれているのではなく、begin と book の意味合成を通じて、book のクオリア構造から begin に取り込まれる情報として分析されている。

ここで、補語名詞の意味情報が begin の意味に取り込まれるプロセスを紹介する。このプロセスはクオリア構造で分析されている。小野 (2005) のクオリア構造の捉え方は本稿が採用する由本 (2014) の捉え方と異なるが、形式役割と主体役割には大きな違いはない。

(13) begin のクオリア構造 (小野, 2005: 48)

EVENTSTR=E1= e_1 : process; E2= e_2 : state
 ARGSTER=AGR1= x: human; AGR2= y: event₁
 QUALIA=FORMAL= P (e_2 , x);
 AGENTIVE= begin_act (e_1 , x, y)

(13) では、事象構造に 2 つの下位事象、項構造に動作主 (x) と開始される事象 (y) が記入されている。クオリア構造の形式役割は本来動詞がもたらす結果が指定されるが、ここでは文脈が不足しているため結果が読み取れず、不完全指定の情報 P (e_2 , x) となっている。主体役割には、動作主 (x) が事象 (y) を開始する (begin_act) という原因事象が記入されている。

(13) に示すように、begin は第二項として事象を要求するが、book はそれ自体が事象を示さないため、両者の間にミスマッチが生じる。これを解消するためには、book の語彙情報から行為に関する情報を抽出し、それを begin に取り込むという共合成のプロセスが必要になる。(14) と (15) では、book の目的役割から read が抽出され、begin の不完全に指定された情報を補完する過程が示されている。

(14) book のクオリア構造 (小野, 2005: 49-50)

QUALIA= CONST= bound_ pages (x);

FORMAL= Print_ matter (x)

TELIC= read (e, w, y);

AGENTIVE= write (e', z, y)

(15) begin the book (小野, 2005: 49-50)

ARGSTER= AGR1= x: human; AGR2= y: event

QUALIA= FORMAL= read (e₂, x, z);

AGENTIVE= begin_ act (e₁, x, y)

(14) では、本の構成部分 *pages* が構成役割に、印刷物 (Printed matter) という上位概念が形式役割に、読者 (w) が内容 (y) を読む (read) という出来事が目的役割に、作者 (z) が内容 (y) を書く (write) という出来事が主体役割に指定されている。(15) は (13) と比べて、変化したのは形式役割のみで、*book* の目的役割から取り込まれた read が加わり、事象 (e₂) において、動作主 (x) が本 (z) を読む (read) ことが指定されている。

このように、共合成によって *began the book* は *began reading the book* と解釈される。なお、共合成が *book* の目的役割ではなく主体役割から情報を選定する場合、*write* の情報が不完全に指定された P (e₂, x) の位置に補われ、*began writing the book* の解釈となる。

次節以降では、「きる」の完遂義と極度義の解釈の形成プロセスも同様に共合成で説明できることを示す。その第一歩として、まず第3節で両解釈の区別を言語テストで検証する。

3 補助動詞「きる」の意味解釈

本節では、「きる」の〈完遂義〉用法と〈極度義〉用法を、「きれない」形への変換可能性によって区別できることを示す。(16) ~ (21) はこの区別を判断するためのテスト文である。

- | | | |
|------------------|------------------|-----------------|
| (16)a. 資料を読みきった。 | (18)a. 苦痛に耐えきった。 | (20)a. 空が晴れきった。 |
| b. 資料が読みきれない。 | b. 苦痛に耐えきれない。 | b.* 空が晴れきれない。 |
| c. 読みきれない資料。 | c. 耐えきれない苦痛。 | c.* 晴れきれない空。 |
| (17)a. 食料を食べきった。 | (19)a. 太郎が疲れきった。 | (21)a. 夜が明けきった。 |
| b. 食料が食べきれない。 | b.* 太郎が疲れきれない。 | b.* 夜が明けきれない。 |
| c. 食べきれない食料。 | c.* 疲れきれない太郎。 | c.* 明けきれない夜 |

以上のテストから、「きる」の可能表現 (「~きれない」形) は、(16) ~ (18) より

完遂義の「きる」とは共起しやすいものの、(19)～(21)より極度義の「きる」とは共起しにくい傾向が見られる。この違いは、補部 VP において動作主の関与があるかどうかで起因すると考えられる。第2節で述べたように、完遂義の「きる」は動作主の行為による事象を、極度義の「きる」は動作主が関与しない自然な状態変化を補部にする。先行研究では、可能表現は動作主の意志的行為の実現に関わるとされている（寺村, 1982: 262-263; 青木, 1980: 170）。従って、前者が可能表現と共起しやすく、後者が共起しにくい傾向にあると考えられる。このテストで注意すべき点は、「VP + きる」の意味解釈が必ずしも一つに決まるとは限らないことである。例えば、「疲れきる」は通常極度義と解釈されるが、(22)では〈完遂義〉として解釈される。それは、(22)の文脈情報は「疲れる」という補部事象に動作主の意図性を補ったからだと考えられる。

(22) プロボクサーの太郎は練習でどうしても疲れきれない自分を責めた。¹⁰

上述の分類基準により、姫野（1999）の問題点である「忘れきる」が完遂義及び極度義の両方に解釈できる原因を説明できる。(6a)の「学科を忘れきる」という事象は、「*学科が忘れきれない」とはならない。これは、学んだ知識を忘れることが意図的ではなく、自然な状態変化だと捉えられるためである。文脈にも動作主の意志を補う表現が見られない。一方、(6b)の「トラウマを忘れきりたい」は、「あのトラウマが忘れきれない」という形になれる。これは、トラウマを忘れる行為が動作主の意志的な行為とみなされやすいことに加え、「～たい」という意志表現が補部事象に動作主の意志を補ったためだと考えられる。

以下3.1節では、まず完遂義と極度義は実は同一の語義であることを示す。次に、意味構造の分析に向けた準備として、両解釈の具体的な意味情報を明らかにする。3.2節では、「きる」の意味構造及び補部 VP との意味合成をクオリア構造で分析し、「きる」が補部 VP のどの部分に作用するかという先行研究では説明されてこなかった課題を解決する。

3.1 補助動詞「きる」の語彙情報

以上より、「きる」は文脈によって2通りに解釈できるが、その意味構造を2種類に区別する必要はない。なぜなら、完遂義は独立した語義ではなく、極度義に依存しているからである。早瀬（2017: 87-88）が指摘したように、他の語義の範囲の中で、特定の

¹⁰ この例文は初稿へのコメントで提示されたものである。

要素との組み合わせが満たされた特殊状況で初めて生じ、その語義を離れて独立で現れない限り、独立した語義とは認められない。(23)に示すように「きる」の完遂義はこの特徴をもつ。

(23) a.* 太郎は一枚のドアを開ききったが、そのドアは開ききらなかった。

b.* 太郎は一枚のドアを閉じきったが、そのドアは閉じきらなかった。

日本語母語話者 10 人に、0～4 点の尺度で容認性判断を依頼した結果、(23a, b) の平均得点はそれぞれ 0.5 点、0.2 点であり、2 点以上を付与した回答者はいなかった。これにより、(23) が容認されず、従って「開ききる」と「閉じきる」の「きる」は完遂義として解釈される場合、結果状態の含意をキャンセルできないとわかる。つまり、(23) では、完遂義は状態が極度に達するという極度義を離れては成立しない状況を示している。したがって、「きる」の完遂義は、早瀬 (2017) が指摘する独立しない語義の認定基準を満たしていると言える。

また、語が多義か単義かを判断する方法として分離テストがある(松本 2010)。例えば、「太郎は起きて (= 目覚めて) いたけど、起きて (= 身を起こして) はいなかった」という文は、二つの「起きる」が別個の語義をもつため、相矛盾することなく成立する。この分離テストを「忘れきる」に適用すると、「*そのことを忘れきった (= 極度義) が、忘れきら (= 完遂義) なかった。」が成立しない。したがって、このテストからも、完遂義と極度義は別個の語義ではなく、同一語義が補部 VP との意味合成を通じて文中で二通りに解釈されるものと判断できる。以上の結果を踏まえて、以下ではまず、完遂義と極度義が具体的にどのような意味情報を持つかを明らかにする。

3. 1. 1 完遂義の意味情報

完遂義を表す「きる」は、「対象のうち、事象が及ばない部分が残っていない」という意味情報が含まれている。この点は、(24a, b) から確認できる。

(24) a. 手元のお金を { 使った / * 使いきった } が、手元にお金が残っている。

b. ガスコンロの汚れが { 落ちた / * 落ちきった } が、ガスコンロに汚れが残っている。

c. 手元の洗われていなかったシャツを { 洗った / * 洗いきった } が、手元に洗われていないシャツが残っている。

(24a, b) において、「手元に残っているお金」や「ガスコンロに残っている汚れ」は、本節の冒頭で述べた、「きる」の補部 VP が及ばない部分に該当する。「きる」の有無で容認度に明確な差が存在することから、「きる」は「補部 VP が及ばない部分の完全な消滅」を含意することが分かる。(24c) では、多数のシャツを洗う状況を想定している。このとき、「きる」の補部 VP が及ばない部分に該当するのは、洗われていないシャツの数量である。

3. 1. 2 極度義の意味情報

ここでは「補部 VP が及ばない部分が残っていない」という含意が、極度義の「きる」にも同様に存在することを示す。「補部 VP が及ばない部分」は、Pustejovsky (1998) 及び小野 (2005) の枠組みに基づき、デフォルト項 (Default argument) ¹¹ として「きる」の補部 VP の項構造に存在していると考えられる。デフォルト項は真の項 (True argument) と並列される概念ある。動詞にとって、真の項は、(25) における *John* のように統語的にも意味的にも不可欠であり、必ず文中に明示される項である。一方、デフォルト項は、動詞の意味に論理的に含まれる必須の項であるにも関わらず、統語的には必ずしも明示される必要のない要素である (小野, 2005: 41; Pustejovsky, 1998: 63)。

(25) John arrived late. (26) John built the house out of bricks. (Pustejovsky, 1998: 63)

(26) では前置詞句によって顕在化する *bricks* がデフォルト項に該当する。デフォルト項は、PP あるいは真の項に組み込まれた句で満たされ、顕在化できる (Pustejovsky, 1998: 66)。(27a) では *wood* が PP に、(27b) では目的語 *house* の修飾詞 (Modifier) として顕在化している。3.1.2.2 節ではこの性質を利用し、日本語におけるデフォルト項のテストを提案する。

(27) a. Mary built a house [with wood]. b. Mary built a [wooden] house. (Pustejovsky, 1998: 66)

以下では、極度義として解釈される「きる」の補部 VP における「事象が及ばない部分」

¹¹ ここで述べる「項 (Argument)」は、統語構造上の項ではなく、論理的 (意味的) な項を指す。Pustejovsky (1998: 61) は、生成語彙論における項構造を、「論理的項の数とタイプの指定、およびそれらが統語的にどう具現するか」と規定する。デフォルト項は、「Parameters which participate in the logical expressions in the quaila, but which are not necessarily expressed syntactically.」と定義されている。つまり、デフォルト項は、クオリア構造における論理式に加えられる論理的項であるが、統語的な項として表されるとは限らず、(28b) のように、修飾語として具現化される場合もある。

の存在とそのデフォルト項としての性質について論じる。

3.1.2.1 補部 VP における「事象が及ばない部分」

極度義の「きる」は状態変化動詞を前項に取り、その状態変化は段階的に生じる。(28a) 及び (29a) が成立し、(28b) 及び (29b) が成立しないことから、状態変化に伴い、「ざわめき」や「雲」が段階的に減少することが確認できる。本研究は、この減少する要素が「補部 VP が及ばない部分」に該当すると主張する。

- (28) a. 会場が静まった。
 b. *会場が静まったが、ざわめきが少しでもなくなっていない。
 (29) a. 空が晴れた。
 b. *空が晴れたが、雲が少しでもなくなっていない。

「静まった」「晴れた」といった事象は、「ざわめき」や「雲」が一定の程度減少することを含意しているが、それらがゼロまで減少することは含意していない。(30) が示すように、「きる」の補部 VP が及ばない部分は、「きる」の付加によって完全に消滅する。

- (30) a. 会場が{ 静まった / * 静まりきった } が、会場にはまだざわめきが残っている。
 b. 空が{ 晴れた / * 晴れきった } が、空にはまだ雲が残っている。

以上より、「きる」の両解釈はいずれも、補部 VP の進行に伴って段階的に減少する「補部 VP の及ばない部分」が完全に消滅するという意味機能を持つと言える。

補部 VP が及ばない部分は、状態変化と共に減少するため、Dowty (1991) の incremental theme に当たる。Dowty (1991) は、有界述語の意味を theme 項と出来事領域の同型写像 (Homomorphism) と捉え、theme の一部である x は、theme を写像する出来事 e の部分出来事 e' に対応すると述べている (Dowty, 1991: 567)。そのような theme が incremental theme と呼ばれる。例えば、「芝生を刈る」では、芝生の一部が短ければ事象は未完了、全てが短ければ事象は完了したと判断できる。Incremental theme は主題役割の一種であり、theme 項だけでなく、通常の path 役割を持つ項に付与されることもある ((31))。

- (31) Drive (a car) from New York to Chicago. (Dowty, 1991: 568)

(31) の場合、Incremental theme となるのは *New York* から *Chicago* へ運転する際に通過する経路 (PATH) であることが明らかである。なぜなら、もしジョンが *New York* から *Chicago* まで車を運転したなら、出来事が始まったが完了していない場合、その経路の一部はジョンによって通過されたが、残りの部分は通過されていないと考えられるからである。

興味深い点は、この例の経路 (Path) が統語的に顕在化した項ではないである。*from New York* や *to Chicago* は、経路の始点と終点を指すにすぎない。この観点から見ると、本節で論じた「きる」の補部 VP が及ばない部分も統語的に必ずしも顕在化しない場合があるが、補部 VP の進行と共に変化するため、Incremental theme として認識できる。

3. 1. 2. 2 補部 VP のデフォルト項として存在する「補部 VP が及ばない部分」

前節で述べたように、「きる」の補部 VP には事象が及ばない部分が存在する。以下では、この「事象が及ばない部分」が補部 VP のデフォルト項として存在することを示す。

デフォルト項が修飾要素としての顕在化するテスト ((27)) を参考にすると、「きる」の前項動詞のデフォルト項も、名詞句補部の修飾要素として顕在化できると考えられる。

- (32) a. [水気が残っていた] 髪を乾かした。
 b. [空欄が残っていた] フォームを埋めた。
 c. [ざわめきが残っていた] 会場が静まった。
 d. [雲が残っていた] 空が晴れた。

(32a, b) の「乾かす」と「埋める」は継続的な状態変化を表す事象であり、完遂義の「きる」の補部 VP である。「髪」と「フォーム」は真の項、「〇〇が残っていた」は真の項に組み込まれた修飾語句であり、両者の関係は (27b) における *wooden* と *house* と同様である。そして、修飾語句「水が残っていた」における「水」や「空欄が残っていた」における「空欄」は、*wooden* における *wood* と同じく、非主要部の役割を果たしている。(32c, d) の動詞は極度義の「きる」と結合する動詞である。「ざわめきが残っていた」や「雲が残っていた」といった修飾語句が「会場」や「空」といった真の項に組み込まれることで、「ざわめき」や「雲」といった「補部 VP が及ばない部分」を示す名詞が顕在化されている。以上から、「きる」の補部 VP はその意味構造内に「事象が及ばない部分」をデフォルト項として含むことがわかる。一方、「事象が及ばない部分」を意味的に含意しない「赤ちゃんが泣く」は「*赤ちゃんが泣ききった」のように「きる」と共起できない。もちろん、文脈を整えれば容認可能になるが、それは事象が及ばない

部分を補う文脈に限られる。

ここまでの、「きる」の二つの解釈に共通する意味情報を整理した。次節では、この共通点に基づき、「きる」の完遂義と極度義に共通する意味構造を提案したうえで、「きる」と補部 VP との意味合成のプロセスを提示する。

3.2 補助動詞「きる」と補部 VP の意味合成

3.2.1 補助動詞「きる」の意味構造

本研究は、補部 VP が及ばない部分の完全な消滅を「きる」がもたらす結果として捉え、その情報を「きる」の構成役割における LCS の結果事象の位置に記載する。さらに、形式役割と構成役割には、不完全指定の情報である「P」と「R」があり、これらは補部 VP の意味情報によって補われる。行為事象の意味情報が補われる場合には<完遂>の意味が生じ、状態変化事象の意味情報が補われる場合には<極度>の意味が生じる。

(33) 補助動詞「きる」の意味構造

AGRSTR= AGR1= y: event

D-AGR= w: incremental theme

QUALIA= FORMAL= P (不完全指定)

= CONST= [[R (不完全指定)] CAUSE[BECOME w NOT BE AT IN WORLD]]

(33) に示すように、「きる」は補部 VP (y) と incremental theme (w) を項として取る。そのクオリア構造では、補部 VP が未定のため、形式役割には不完全指定の P が、構成役割には不完全指定の R が置かれる。LCS から見れば、R は「補部 VP が及ばない部分が残らない」という結果事象の原因に当たる。結果事象は incremental theme (w) の消滅であり、[BECOME w NOT BE AT IN WORLD] で表記している。この結果事象の原因は補部 VP の進展にあるため、R には補部 VP の LCS が取り込まれるのが適切だと考えられる。

3.2.2 意味合成：AGR1 に行為事象が補われる場合

(34)・(35) は、「きる」の AGR1 の位置に行為事象の意味情報が補われる場合、つまり、「きる」の補部 VP が行為事象である場合の意味構造を示している。

(34) 「論文を書く」

AGRSTR= AGR1= x: agent; AGR2= y: patient (論文); D-AGR= w: incremental theme
 QUALIA= FORMAL= exist (e, y)

CONST= [[x ACT] CAUSE[BECOME y BE AT IN WORLD]]

(35) 「論文を書ききる」

AGRSTR= AGR1= y: write_event; AGR2= x: agent; D-AGR= w: incremental theme
 QUALIA= FORMAL= exist (e, y)

CONST= [[x ACT] CAUSE[BECOME y BE AT IN WORLD]]] CAUSE [BECOME w NOT BE AT IN WORLD]]

(34) の項構造には、「書く」の動作主 (x) と作成される論文 (y) とデフォルト項としての incremental theme (w) を記載している。3.1.1 節の論述に従えば、ここでの incremental theme は、書きたい内容のうちまだ書いていない部分である。形式役割として、論文 (y) が存在する (exist) ようになるという結果状態を記入している。そして、「書く」が作成動詞であるため、構成役割として作成動詞に共通する LCS (伊藤・杉岡, 2002) を記入している。「論文を書く」のクオリア構造 ((34)) が「きる」のクオリア構造 ((33)) と合成し、(35) のような構造が生まれる。(35) では、「論文を書く」の形式役割 exist (e, y) が、「きる」の形式役割における不完全指定の P に取り込まれている。また、(34) の構成役割に指定される「書く」の LCS が、「きる」の構成役割における不完全指定の R に取り込まれている。さらに、(34) の動作主は「きる」の項構造に取り込まれることで、「きる」が要求する動作主の意図が満たされる。

以上のように、補部 VP の意味情報が「きる」の不完全指定の意味情報に補完されていく過程が、両者の意味合成であると考えられる。

3.2.3 意味合成：AGR1 に状態変化事象が補われる場合

(36)・(37) に、補助動詞「きる」の AGR1 の位置に状態変化事象の意味情報が補われる場合、つまり、補助動詞「きる」の補部 VP が状態変化事象である際の意味構造を示す。

(36) 状態変化事象を表す補部：「空が晴れる」

AGRSTR= AGR1= y: theme(空); D-AGR1= z: clear_event; D-AGR2= w: incremental theme

QUALIA= FORMAL= at (e, y, z)

CONST= [y BECOME[STATE y BE AT z]]

(37) 「空が晴れきる」

AGRSTR= AGR1= z: clear_ event; AGR2= y: theme (空); D-AGR= w: incremental theme

QUALIA= FORMAL= at (e, y, z)

CONST= [[y BECOME] [STATE y BE AT z]] CAUSE[BECOME w NOT BE AT IN WORLD]]

(36) 「空が晴れる」の項構造では、真の項「空 (y)」とデフォルト項「晴れた状態 (z)」 「空にある雲 (w)」が含まれる。形式役割における at (e, y, z) は、空 (y) が晴れている状態にある (at) ことを示し、「きる」の形式役割における不完全指定の P に取り込まれる。また、(36) の構成役割には「晴れる」の LCS があり、これが「きる」の構成役割における不完全指定の R 位置に取り込まれる。さらに、「晴れる」の theme 項「空」は「きる」の項構造に取り込まれ、「晴れきる」の theme 項になる。このように、「きる」と補部 VP との共合成が生じていると考えられる。「晴れる」の項構造には動作主が存在しないため、「きる」の項構造にも動作主が取り込まれない。この動作主が関与しない意味構造は、(16) ～ (21) で観察した極度義の「きる」が可能表現と共起しにくい原因であると考えられる。

以上のように、本稿が提案した意味合成のプロセスによって、「きる」の二つの意味解釈の成因や用法の差異を説明することが可能である。

本研究が提案する意味構造は、「きる」が補部 VP のどの部分にどのように作用するかという日高 (2022, 2025) が十分に説明を行わなかった課題を解決できる。3.1.1 と 3.1.2.1 節で述べたように、「きる」は補部 VP の意味情報における「対象のうち事象が及ばない部分」の消滅を含意する。この「対象のうち事象が及ばない部分」が補部 VP のデフォルト項であり、incremental theme の主題役割が付与される。したがって、「きる」は補部 VP の incremental theme に作用する動詞であり、これは日高 (2025) が提案した「きる」が補部 VP の「最終到達点」を指し示すということを裏付ける。なぜなら、incremental theme が消滅する時点が補部 VP の最終到達点となるからである。

4 結論

本研究では、「きる」の意味情報を考察し、その完遂義と極度義の間の共通点、両解釈が成立する要因、補部 VP との意味合成及びレキシコンでの表記方法を検討し、以下の 3 点を提案した。第一に、完遂義と極度義は、可能表現との共起可否によって区別できる。第二に、分離テストにより、完遂義と極度義は別個の語義ではなく、同一語義の

範囲内で補部 VP との結合によって解釈が分かれたことを示した。両解釈はいずれも「補部 VP が及ばない部分の消滅」を含意し、これは Dowty (1991) の incremental theme と Pustejovsky (1998) のデフォルト項に該当するため、補部 VP の項構造に記載できる。この共通点に基づき、両解釈を統合する意味構造を提案した。第三に、クオリア構造と語彙概念構造を併用し、「きる」の意味構造及び補部 VP との意味合成のプロセスを提案した。

これらの提案は、「きる」が複数の解釈を持つ理由や、各解釈における結合制約の成因といった先行研究で残された課題を解決できるという点で意義がある。さらに、「補部 VP が及ばない部分の消滅」という機能は、完了相を表す他の補助動詞（「ぬく」「つくす」「とやす」）にも共通する可能性があり、その意味構造の分析への応用が期待される。

参考文献

- 青木 伶子 (1980) 「可能表現」 国語学会 (編) 『国語学大辞典』 169-171, 東京堂出版.
- 伊藤 たかね・杉岡 洋子 (2002) 『語の仕組みと語形成』 研究社.
- 小野 尚之 (2005) 『生成語彙意味論』 くろしお出版.
- 杉村 泰 (2008) 「複合動詞「-切る」の意味について」 『言語文化研究叢書』 7, 63-79, 九州大学大学院言語文化研究院.
- 寺村 秀夫 (1982) 「日本語のシンタクスと意味 I」 くろしお出版.
- 早瀬 尚子 (2017) 「多義語の分析 II—認知意味論的アプローチ」 中野弘三 (編) 『語はなぜ多義になるのか—コンテクストの作用を考える』 80-105, 朝倉書店.
- 姫野 昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』 研究社.
- 日高 俊夫 (2022) 「統語的複合動詞「V-切る」「V-ぬく」の意味構造と統語: 文法化における比較に向けて」 『トークス = Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin: 神戸松蔭女子学院大学研究紀要言語科学研究所篇』 25, 37-50, 神戸松蔭女子学院大学学術研究委員会.
- 日高 俊夫 (2025) 「統語的複合動詞 V-Kir における意味の修復」 眞野美穂・小栗哲哉・江口清子・于一楽 (編) 『レキシコン研究の広がりと深まり』 69-89, 大阪大学出版会.
- 松本 曜 (2010) 「多義性とカテゴリー構造」 澤田治美 (編) 『ひつじ意味論講座の第 1 巻 語・文と文法カテゴリーの意味』 23-43, ひつじ書房.
- 由本 陽子 (2014) 「語彙的複合動詞の生産性と 2 つの動詞の意味関係」 影山太郎 (編) 『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて—』 109-142, ひつじ書房.

- Dowty, D. (1991). Thematic proto-roles and argument selection. *Language*, (67), 547-619.
- Pustejovsky, J. (1998). *The Generative Lexicon*. MIT Press.

データベース

国立国語研究所『複合動詞レキシコン』 <https://www2.ninjal.ac.jp/vvlexicon/>